

「序」および「地理的背景と外延的定位」

しお た みつ き
塩 田 光 喜

序

現代の文化人類学、ことにその本質部分を成す民族誌のスタイルは、マリノフスキーに始まり、エヴァンス＝プリチャードに至る20年間にほぼ決せられた。第1次世界大戦が終わり、第2次世界大戦の始まるまでの頃のことである。

その後の理論的関心の焦点の推移や民族誌に盛られたデータに対する解釈の仕方をめぐる転変（戦後の構造主義の興隆はその一つの画期を成した）の激しさにもかかわらず、また民族誌のスタイルは時とともに一層洗練されたものとなってきはしたが、マリノフスキーら創始者たちが現代民族誌のスタイルを確立した民族誌革命ともいべき変化に匹敵するできごととは生じていない。

それではマリノフスキーらがもたらしたものは何であったのか。一言でいえば、それは、社会ないしは文化を閉じた体系として見ることであった。すなわち、民族誌の対象とする民族の社会および文化を一種の自身で完結した（外部の作用からは閉ざされた）定常状態にあると見なし、その状態のなかで、社会や文化の構成要素がどのように連鎖し作用しあって一つの全体を成しているかを描き出しさらにはそのシステムの特性ないしは原理を抽出することであった。具体的に、その構成要素とは親族関係、交換、互酬制度、政治的リーダー

シップ、宗教儀礼、呪術、神話等々といったものであった。

このスタイルはきわめて高い有効性をもち、数多くの優れた民族誌を生み出した。もちろん、このスタイルの外に異なったスタイルの民族誌を書く者や、方法論の革新を唱える者たちはいたが、それらが生み出したものは現在までのところ上記のスタイルがもたらしてきた成功の影を踏むことすらできていない。

一つの民族の文化・社会を総体として十分に人を納得させるだけの客観的妥当性をもって描き出すことは、試みたことのない者が考えるかもしれない以上に困難なことである。

まず、1人の人間が接する人間の数は限られており、彼が直接目にすることができることは多くの場合、きわめて断片的である。さらに、それらの直接経験と伝聞によって得られる知識はきわめて雑然としており、錯綜をきわめる。しかも、人間の経験や知識は個人的な利害関心や感情、偏見によって強く染め上げられている。事実、われわれのうち何人が、現代日本の社会と文化について、他者に対し、またわれわれ自身に対し、総合的に、過不足なく、しかも十分な客観的妥当性をもって記述しうるだろうか。

それでは、なぜマリノフスキーらは諸民族の文化・社会の説得力ある記述の確立に成功したのだろうか。

それは、対象が完結した定常状態という設定で1人の人間が、その見聞を総合することを可能とせしめる条件が、その民族の側にあったからである。簡単に言ってしまうと、彼らの対象とした社会が未開社会であったからである。未開（未だ開かれざる）すなわち外部に対して閉ざされていて、完結的な社会であったからである。もちろん、いかなる民族すなわち言語集団も、完全に孤立して完結した社会を成すことはない。戦争や交易といった社会的相互作用や文化間の交流は常にいずれの社会でも起こっていた。しかし、それは文明社会のあり方とはやはり決定的な差異をもっていたのである。

マリノフスキーにせよ、ラドクリフ＝ブラウンにせよ、レイモンド・ファースにせよ、エヴァンス＝プリチャードにせよ、現代民族誌のスタイルを形成していった人類学者の調査地はオセアニア、アフリカ、またはインド洋上の小島嶼の未開地域であった。そしてその後の優れた民族誌もほとんど全て未開社会に関するものである。少なくとも、ニューギニア研究における優れた民族誌はほとんどがそのようなものであったし、私自身そのような文献を通じて私のニューギニア像を描いていたのであった。自身、調査を始めるまでは。

私がニューギニア高地のインボング族の地（イアリブ地域のアンブプル村）で調査を始めたのは1985年6月のことであった。しばらく暮らしているうちに、どうも「これは話が違う」と思い出した。まず、伝統的な宗教儀礼は全くななくなっていた。村人の多くはファンダメンタリズムの一派に属するキリスト教徒で、金曜と日曜には村の教会へ

礼拝に行く。異教の神々や精霊や祖先を崇める伝統的宗教儀礼は、いち早く廃されていた。貨幣が流通し、村には雑貨屋が3軒もあり（1軒はすぐ閉店したが）、米や日本製のイワシやサバの缶詰やコンビーフ缶詰や中国製のピーナッツの缶詰、風船ガムなどを売っている。子供たちの半ば以上は小学校へ通っており、英語や算数を習っている。朝7時半に出かけて昼3時半に帰ってくるから毎日8時間は学校で過ごしているわけだ。子供たちが帰ってくると、村の公共の広場でバスケットやサッカーをして遊ぶ。そのような側面が日常的な、生活風景としてはっきりと私の目に映るのに対し、親族関係や婚姻システムなどといった制度は、明瞭な輪郭を欠いた、あいまいなあり様を示していないのだった。

「伝統は一体どこへいったのか」と私は思った。どうも村人たちは伝統を守ろうとする気はあまりないらしい。私の見聞に触れる伝統的なものは、どれも、統合性を失った断片、かけらとしてしか存在していないのだ。伝統文化はたががはずれ、統合を失い、あるものは消滅し、またはばらばらに飛び散り、キリスト教、学校教育、貨幣経済といった制度が現実の大きな部分を支配していたのである。

調査者が話をでっちあげるのでなければ、完結的に統合されたインボング族の伝統文化などというものはどこにもないように思われた。

しかし、そうも言うてはいられないので、昔を知る老人たちに白人の来る前はどうかだったのか、たずね始めた。かつてあったであろうそれ固有の要素の連関を通じて統合された文化を描き出すのは無理があるとしても、少なくとも存在していた一つ一つの慣習・制度は書き留めておきたいと考えたのである。事実、これは、現在の日常生活が

どう見えるにせよ、われわれ人類学調査者にとっての責務である。われわれは何よりもまず過去および現在の人類が持っていた（持っている）慣習・制度の記録者である。人間、社会、文化についての一般論がどう移り変わろうと、それが依拠すべき不可欠な足場の一つとして、記録された慣習・制度を踏まえないなら、空論にすぎない。人類が形作ってきた慣習・制度のなかには人間が培ってきた英智と、そして不条理が埋めこまれているのみならず、人類はまさしく本能によってではなく、そうした慣習・制度によって自らを人類として形作ってきたからである。現在に存在する、またかつて存在した慣習・制度を通過することなく立てられた人間や社会に関する仮説はそれがいかに整合的に見えようとも（あるいはむしろ単純化された整合的な外観に固執するがゆえに）無根拠な憶説にすぎない。

また、慣習・制度を老人たちの記憶のなかから再構成していくことは、現在のニューギニア高地の文化と社会の状況を把握するうえでも不可欠なことである。

たとえば、現代日本の文化・社会の状況を把握しようとしてやってきた外国人が、日本の古典、歴史、民俗をたずねることなく、その時、目についた事実のみから議論を組み立てたとするなら、皮相な観察以上のものを得ることはできないであろう。それと同じことである。古い世代は往々にして新しい世代を理解し難い異邦人のごとく言うが、それは人間の判断がいかに主情的に左右されているかという一証左にはなれ、客観的に自己を検討してみるならば、人間は先行する世代からの膨大な文化遺産によって、いかにその行為と主観の圧倒的部分を決せられているか、わかるであろう。

と同時に、ここ50年ほどのニューギニア高地諸社会が、彼らにとって空前絶後の変化を蒙ってきたこともまた疑いない。

なぜなら、彼らは初めて文明というものと遭遇したのである。一民族が最初に遭遇した文明は多くの場合、その民族の基本性格の形成上に決定的な刻印をしるす。日本においては稲作導入から律令国家成立に至る形成期をもたらした中国文明とそれを介して伝来した仏教の第一撃が、いかに日本文化の塑型を型どり、結晶化させ、爾後の歴史時代を貫きとおすアイデンティティとトラウマ（精神的外傷）を形作ったかを考えてみればよい。

実は、文明そのものを私が鋭く意識したのはニューギニアにおける2年間でのことであった。それまでは近代と伝統という世上に広く流布した対立図式によってものを考えていたのである。それは、文明の第一撃が民族文化のなかに埋めこまれて1000年以上が経った日本においては、ある意味で当然のことでもあった。

そのような私にとって、私が生まれたと同じ頃初めて文明とぶつかった社会に文明の第一撃もたらした衝撃力と感染性（＝普遍性）はことに驚嘆すべきものであった。もし、私が生まれた頃に、私の社会が初めて文明の洗礼を受けたとしたらどうだろう。

個々の民族文化とは異質の原理により成立する文化の形態であり、それを超越しようとする文明の力と感染性（＝普遍性）の源泉はどこにあるのか、そして民族文化はその異質の原理をその体内にどのようにして呑みこんでいくのか、という問が未開社会から文明世界にひきずり出されたばかりのニューギニア高地においてはむき出しの姿を現わして、そこを訪れる者に答えることを強いているのである。

具体的に、ニューギニア高地を支配した最初の文明は近代西洋文明とキリスト教の複合されたものであった。

ニューギニア高地においては、文明化はとりもなおさず近代化でありキリスト教化のことであった。

日本に生まれ育った私は、キリスト教と近代文明を迂闊にも漠然と一つに重ね合わせて考えていたのであったが、近代文明の母胎の一つがキリスト教であったことは間違いにせよ、いったんできあがったそれと、キリスト教とは全く相容れない異なった二つの文明なのであるということをニューギニア高地において初めて思い知ったのである。考えてみれば、聖書を一読しただけでそれが近代文明とはいかに異質なものは明白なのであったが。

それゆえ、ニューギニア高地のこの50年を「近代化」という言葉で表示することは事の真実を著しく歪めるものである。

ニューギニア高地の50年に生じたことは、まず何よりも最初の文明にぶつかったということであり、そして、それが近代文明とキリスト教であったということである。それは、われわれのように文明の力の下に2000年近くを経て、文明が民族文化のなかに組みこまれた後に経験した「近代化」

とよばれる事態（しかもそこではキリスト教化はほとんど全く進行しなかった）とは、近代文明との遭遇という要素をとれば同じであっても、意義も状況も全く異なったものなのである。

それゆえ、まず「近代化」よりも根本的に一体「文明」とは何か「文明化する」とはどういうことか、を問う必要がある。ニューギニア高地ではそれが「近代化」と「キリスト教化」という二重の相で現われる。それはわれわれの「古代」が「中国文明化」と「仏教化」という二重の相によって開幕したのと相似ている。

このように定位する時、ニューギニア高地50年の経験の意味がはじめて適切な形をとり始める。

文明と初めて遭遇したことによる歴史時代の形成期であるという点で、ニューギニア高地の現在は、文明史的に言うなら「古代」なのである。その「ニューギニア古代」を形づくる一つの要素として「西洋近代文明」があるのだ。それこそが、いかにわれわれの常識に飼い慣らされた耳に奇異に聞こえようとも、1000年を単位とする文明史の視点で虚心に現在を見つめる時に出現する事実の様相なのである。

以上の問題意識を出発点として、筆者がニューギニア高地で行なったフィールドワークの成果を順次本誌で発表していく予定である。

地理的背景と外延的定位

- I ニューギニア島とその高地
- II 東ニューギニア高地語系
- III 定位の経緯
- IV インボング族を定位する
- V 結 論
- 付 表

I ニューギニア島とその高地

ニューギニア島はオーストラリア大陸の北、南緯1度から11度、東経131度から151度に広がる世界第2の大島であり総面積は81万平方キロに達する。

極楽島の姿にたとえられるこの島の、首から尾に至る脊梁を東西に貫通するニューギニア高地は、この島の骨格を定め、そこから発する幾つかの大河川を通して低地沖積平野を形成した。

ニューギニア島は大陸外縁部に形成された島弧として日本と類似した地形的特徴をもつが、そのスケールの大きさに比例して、山岳高地はさらに高く（最高峰カルステンツ〔Carstensz〕山5030メートル）、険しく、かつ部厚くふくらみ、そこより発する河川もまた日本のそれより大きく、長く、それら河川が形成する低地平野はさらに広大である。

この尺度変換は、人の集落の高度分布にもまた移し換えられる。ニューギニア島の人口分布の顕著な特徴は、それが高地地域に著しく稠密で、低地・中高地地帯に非常に稀薄なことである。ここに高地地域とはおよそ海拔1200メートル以上の土地をいう^(注1)。このラインが境界線となつて、それより標高の高い地には1平方キロ当たり数十人、ときには

2, 3百人に至るほどの人口稠密地域が至るところに広がるのに対し、それより低い地になると一様に人口密度が1平方キロ当たり数人の規模となり、1平方キロ当たり1～2人という人口稀薄地域が広大な領域を占めるのである。

この海拔1200メートルラインから、人の居住上限の2500メートルラインの高度に居住する人間たちがわれわれがこれから見てゆこうとするニューギニア高地人なのである。

日本では、海拔1200メートル以上の高地に人口集中地域がつくられることはない。それは一つには、緯度の高さのため、この高度になると冬の気温が著しく低くなることもあるが、同時に、日本列島の骨格では海拔1200メートル以上の地域に人間生活が広範に展開しうるような平坦地をのせるだけの包容力を欠いていることにも一因がある。たとえば日本において上高地より標高の高い土地で農耕地を含む100万人の人間を容れるだけの平坦地があるだろうか。ところがニューギニア島はそのスケールの大きさのため、むしろ1200～2200メートル地帯にこそ、広域の山岳盆地が存在するのである。その最大のものは、ワーギ（Wahgi）河谷盆地（海拔1700～1800メートル）で東西約60キロ、南北は最長で約50キロ、狭い部分でも約20キロに達する。

ニューギニア高地を、ニューギニア島における人口稠密地帯としたのはまず第1にこのような地理的条件であった。

（注1） 谷内達『パプアニューギニアの社会と経済』アジア経済研究所 1982年 12ページ。

II 東ニューギニア高地語系

さて、ニューギニア高地は、そこに住む人たちの生活と文化の様式によっていくつかの塊りに分けることができる。

最も明快な境界線は、大河ストリックランド(Strickland)河が形づくるものであり、それを境とする差異は、住民の服装のうえに鮮やかに映し出される。すなわち、ストリックランド河以東は、男の局所が樹皮のベルト、前垂れ、そして後ろにさしたタンゲットの大きな葉によって覆われるのに対し、ストリックランド河以西では、ひょうたんからつくったペニスケースとなるのである。

そして、この服装上の分岐線は、同時に、文化の決定的要因である言語分類上の分岐線ともほぼ重なる(註1)。

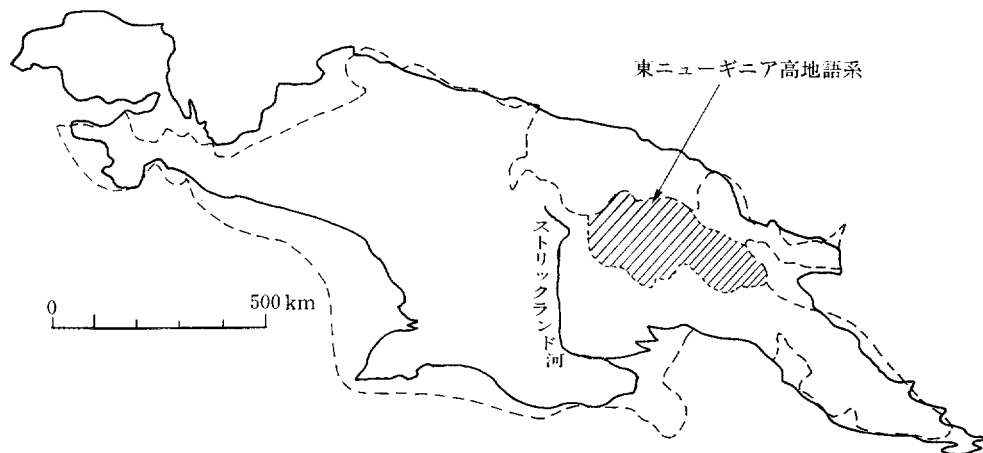
言語学者(註2)によれば、ストリックランド河以東、現在のパプアニューギニアの高地5州(イースタンハイランズ、チンブー、ウェスタンハイランズ、エ

ンガ、サザンハイランズ)の高地住民は、数十の異なる言語グループに分かれるが、それらニューギニア中央高地諸族は言語学上の一つの語系(stock)東ニューギニア高地語系(East New Guinea Highlands Stock)を成す。このことは、そのうちに含まれるどの二つの言語同士をとっても、その外のどの言語とよりも近縁であるということの意味する(第1図)。

われわれがこれから見てゆくのはニューギニア高地のうち、この東ニューギニア高地語系の諸民族についてであり、それ以外の高地諸民族はひとまず考察の外におくこととする。

それは、一つには、以上述べたように、このグループが明示的にまとまった一つの文化的塊りを成し、しかも、そこに含まれるほとんどすべての民族についての詳細な報告がなされているからであり、それに対し、その他の諸民族に関する報告は、まばらであり、何がその地域の諸民族の共通性であり、何が個々の民族の特徴を成すのかについて、十分な根拠をもって語るに足るだけの資料

第1図 トランスニューギニア語門とそこにおける東ニューギニア高地語系の位置



(出所) S. A. Wurm 編, *Papuan Languages and the New Guinea Linguistic Scene*, New Guinea Area Languages and Language Study Vol. 1, キャンベラ, Australian National University, 1975年, に拠った。

が揃っていないからである。

東ニューギニア高地語系の諸民族を取り出して論ずる理由はもう一つある。

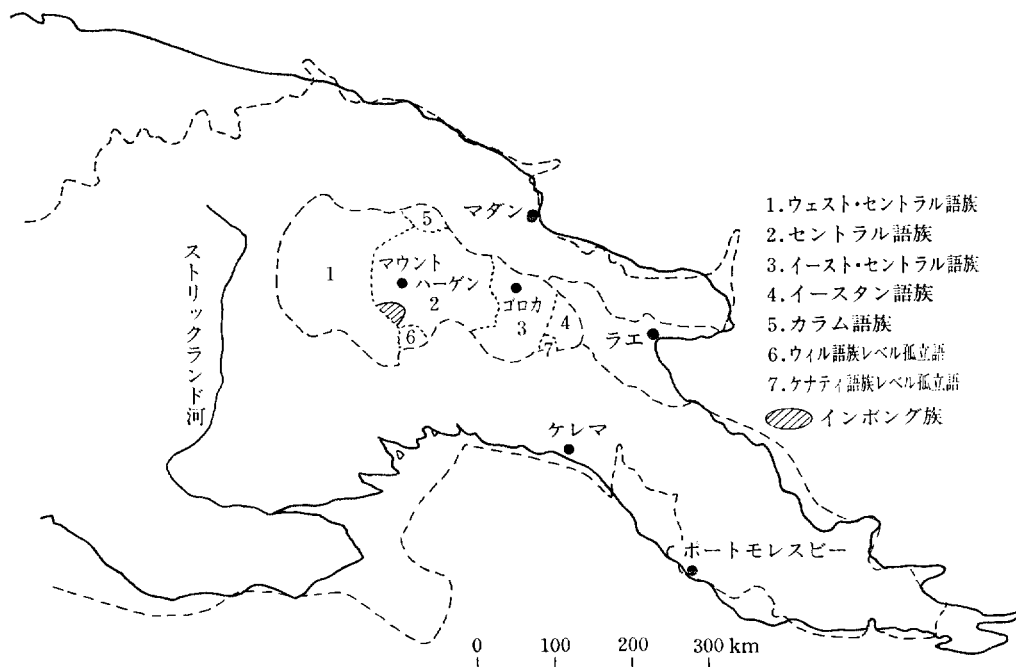
それはそこに属する諸民族が、他とは違って、一つの非常に共通した外部世界接触の歴史を共有するということである。その経緯については後に詳しく述べるが、それはニューギニア島の植民地史および独立後の歴史に由来する。

さて、われわれがこれから見ていく対象は、東ニューギニア高地語系に含まれる言語を持った諸民族とその領域の総体であるが、それは、ニューギニア島の東半と周辺島嶼からなるパプアニューギニアに含まれ、その行政区分のうえでは、イースタンハイランズ、ウェスタンハイランズ、チンブー、エンガ、サザンハイランズの高地5州のほとんどすべての住民と大半の土地からなる（第

2図）。すなわち、言語上の東ニューギニア高地と行政上の東ニューギニア高地は互いにほぼあい覆いあう関係にあるのだが、定義はあくまで、言語によるものとする。行政区分はあくまでも便宜的・人工的なものにすぎないからである。

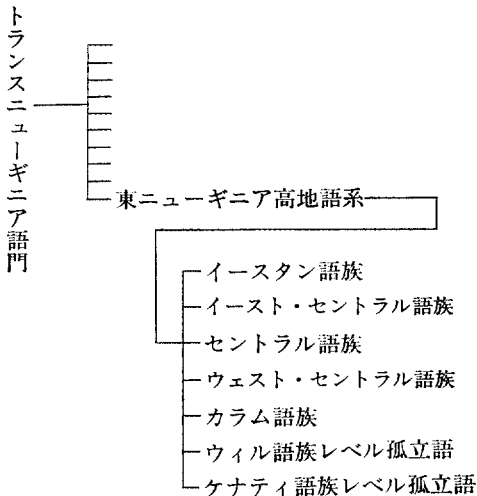
言語学者によれば、東ニューギニア高地語系はさらに、五つの語族 (family) と二つのファミリー・レベル・アイソレイト (family level-isolate) に分かれる^(注3)(第3図)。このうち、カラム語族 (Karam), ウィル語族レベル孤立語 (Wiru), ケナティ語族レベル孤立語 (Kenati) は、広がりにおいても、人口においてもきわめて小さい比重を占めるにすぎず、この語系の大半は、残る四つの語族からなる。イースタン語族、イースト・セントラル語族、セントラル語族、ウェスト・セントラル語族と言語学者が名づけるものである。われわれがこ

第2図 東ニューギニア高地語系とそれを構成する語族



(出所) 第1図と同じ。

第3図 トランスニューギニア語門における東ニューギニア高地語系諸語族の系統関係



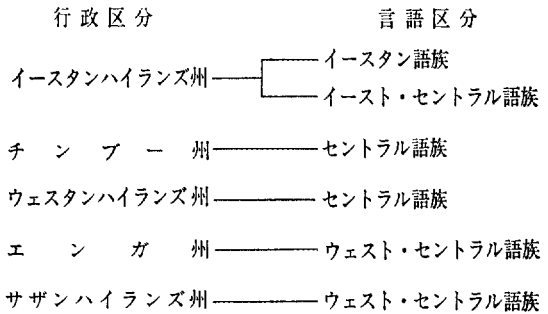
(出所) 第1図と同じ。

れから見ていくのはこの主要4語族に、ウィル語族レベル孤立語を加えたものである。

行政区分との関係から言えば、イースタン語族とイースト・セントラル語族の領域をあわせたものが、行政上のイースタンハイランズ州のほぼ全域に重なり、セントラル語族の領域はウェスタンハイランズとチンブーの2州を加えたものにほぼ相当し、ウェスト・セントラル語族の領域はエンガとサザンハイランズの2州の高地地域とほぼ一致する(対応関係は第4図参照)。この行政区分の言語区分との照応性の高さは、オーストラリア統治府がニューギニア高地を統治するうえで、現地社会の実態に対応しようと努力したことを物語っている。

さらに、これら語族は各個別言語に分かれており、それら個別言語を共有する人間たちの集まりを、ここでは民族と呼び、これが文化を担う基本単位として、民族誌の対象となる。それゆえ、原理的には、日本語を共有することを基準にして定める日本民族とその文化は、人口1万人程度のニ

第4図 東ニューギニア高地の行政区分と言語区分

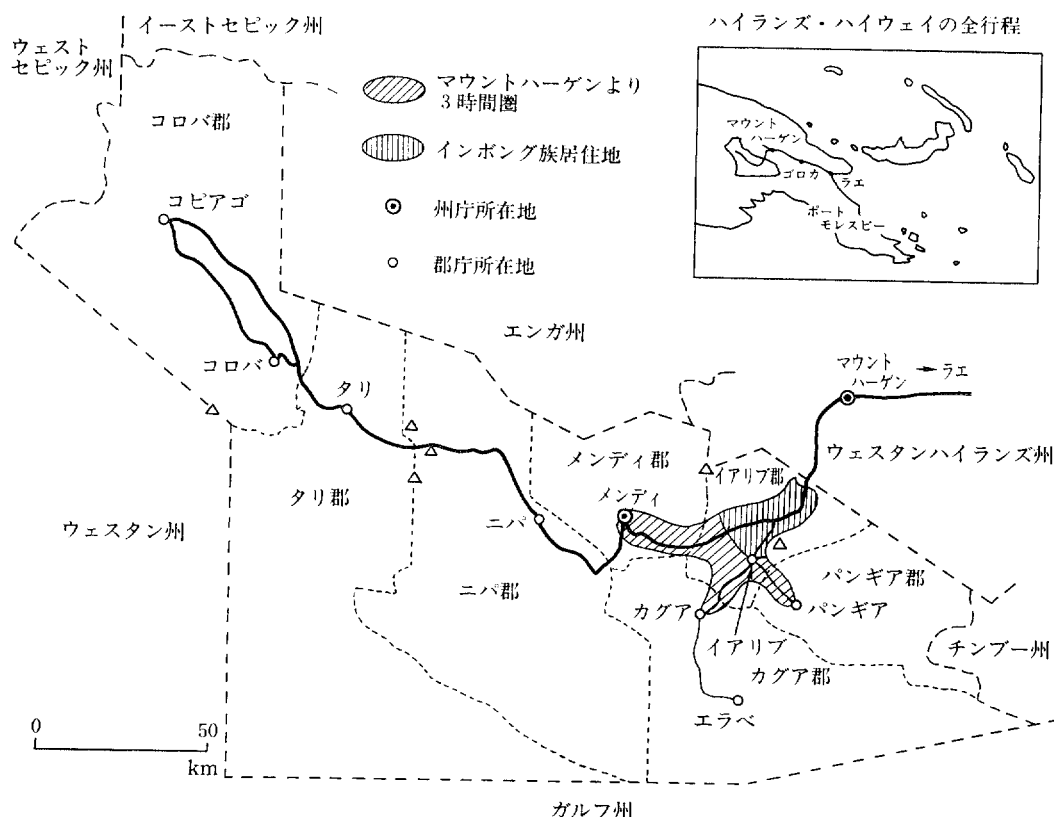


(出所) 第1図と同じ。

ューギニア高地のたとえばインボング族とその文化と同等に扱われる。すなわち、民族誌および文化人類学の対象は個人ではなく民族であって、ある民族がどれだけの人口を持つかは意味をもつとしても二義的なものでしかないのである。

さて、ニューギニア高地にはそのような民族が数十を数える。以下、付表で語族別にそこに含まれる言語とそれを話す人口を言語学者の分類に従って列挙する。この言語分類はかならずしも確定されたものではなく、ある言語学者によって二つの言語集団(=民族)と分類されたものが、別の言語学者によって一つの言語集団の二つの方言集団とされる場合も多く、個々の言語学者においてすら時とともに分類が変更されることもまれではない。また、ニューギニア高地のように狭い地域に数多くの民族がひしめきあっている所では、言語学者はその全てをカバーできず、また知り得た民族についても勢い認識が浅くならざるを得ないので、一民族の地に長期間を過ごす人類学者から見れば、その分類が皮相で不適当に思われるケースも少なくない。私の調査地域周辺の言語についての付表の分類は私には不適当に思えるが、ここではそうした細部の厳密な確定よりも、ニューギニア高地の言語の分かれ方がどのように激しいか

第5図 サザンハイランズ州とハイランズ・ハイウェイ



(出所) W. French; M. A. H. B. Walter 編, *What Worth Evaluation?* ポートモレスビー, Institute of Applied Social and Economic Research, 1984年, に拠った。

ということの概観を得るために掲げるものである。以後、ここにあげた民族名(言語名)は訂正を要する時以外は注釈抜きで挙げていく。

さて、われわれ日本人の常識からすれば、地続きでこれだけ狭い空間に数多くの異民族がひしめきあっているという事態は驚くべきものである。しかし、逆に、彼らにとっては、1億(彼らにはそのような桁の数に対する観念もなかった)を超える大人口が一つの言語を共有しているということこそ想像を絶することなのである。新石器文化において、こうした言語分岐のはなはだしきはむしろ常態であって、何百万、何千万という桁で一つの言

語集団が形成されるという事態は、むしろ、文明発生以後ここ数千年の間に人類が経験し始めたきわめて最近の現象であるにすぎない。

とまれ、白人到来以前のニューギニア高地の大多数の人々は、その生涯を自らの民族の有する小さな天地の間で生きていたものであり、さらに言えば、そのなかの一つ一つの村が、われわれにとってはさしづめ一つの国に相当する政治・軍事・安全保障上の独立単位を成していたのである。人々は自分の言語集団とせいぜいそれを取り巻く諸民族しか知らず、それが世界の全てだったのである。

何万年にもわたるこの状況が破られ始めるの

は、白人が新たな秩序をもたらしたついで50年ほど前のことである。

白人たちが各民族の平定にやってくるたびに最初に行なったのが、この村ごとの群立的政治状況の打破と一様な平和と法秩序を課したことであった。この白人たちのいわゆるパックス・オーストラリアーナの出現と、白人たちが統治の必要上つくり出した行政道路は、少しずつニューギニア高地の各民族の移動と接触を促進し、人々の世界をおし広げていった。とはいえ、この行政道路は各民族の境で至る所切れており、そのうえ人々の移動はすべて徒歩で、山岳高地を隣の民族の地に至るまで近い所で1日、遠くは2～3日、さらにそれを超えると1週間もかけて異族の地を野宿しながら歩いてゆかねばならないという状況が依然として人々の移動と接触を強く制約する条件として立ちはだかっていたのである。

これを最終的に打破したのが、1952年から始まり^(注4)、80年までには全行程が完成したハイランズ・ハイウェイの開通である。

この道路はニューギニア島北岸の町ラエ (Lae) からイースタンハイランズ州の東端に入り、高地諸州を通り抜けてサザンハイランズ州の西端にまで達する全天候型自動車道であり、これとそれから分かれる支線道路によって、東部ニューギニア高地語系に属するほとんど全ての民族は、バスで2日以内の行程でストック内の他のどの民族の地へも移動していけるようになった (第5図)。

事実、ハイランズ・ハイウェイの開通はニューギニア高地の地理上の孤立を破って、外部世界 (ニューギニア島海岸部、そしてそれを超えた近代世界) に結びつけ、その結果、人と物の移動を飛躍的に高め、東部ニューギニア高地語系という学問上の分類の単位を、一つの現実上の地域経済・交通圏に

転化させ文化上の類似性と政治・経済上の共通利害の土壌のうえに、高地全体を一つとする地域意識とニューギニア高地人 (彼ら自身言うところのハイランダー) としてのアイデンティティを浸透・凝結させていったのである。こうして、土着文化の公分母のうえからも、近代国家の政治・行政枠組のうえからも、近代的貨幣経済と交通体系のうえからも、東部ニューギニア高地語系は、一つの有機的全体として、そのうちのどの民族も互いに他との関係のなかで変化していかざるを得ない相互連関システムとしての性格を得るに至ったのである。

(注1) ただしドゥナ (Duna) 族だけは例外。

(注2) Wurm, S. A., "Eastern Central Trans-New Guinea Phylum Languages," S. A. Wurm 編, *Papuan Languages and the New Guinea Linguistic Scene*, New Guinea Area Languages and Language Study Vol. 1, キャンベラ, Australian National University, 1975年, 461～491ページ。

(注3) 同上論文 467～470ページ。

(注4) Downs, Ian, "Kiap, Planter and Politician: A Self-Portrait," James Griffin 編, *Papua New Guinea Portraits: The Expatriate Experience*, キャンベラ, Australian National University Press, 1978年, 245ページ。

III 定位の経緯

さて、私自身は1985年から87年にかけて、この東部ニューギニア高地語系に属するインボング族の地でフィールド調査を行なったのだが、「序」でも述べたように変容はきわめて大きく、もはや白人が来る前の社会をそれ以後の変化と切り離して、あたかも変化が生じなかったかのように語ることは魂なき抜殻を論ずるに等しいと思った。人々をひきつけ、人々を衝き動かしているものは、決して失われた慣習・制度ではなく、あくまでも、現実存在する観念や価値であるからだ。

もし、インボング族固有の精神があるならば、現在を通じてそれが現われなければおかしい、と私は思う。そして、眼前で展開している彼らの暮らし、急速な変容の流れのなかで1回きり、2度とくり返され得ない今この時点の彼らの営みを記すことこそフィールドワーカーの最大の使命だと思うに至った。おそらく何百年か後、文化人類学という枠組が意味を失った時、人類学者は、かつての教会の年代記作者のごとき存在であったのだということが明らかになるであろう。

私は、私がインボング族の地に立つまで、一体何が起こったのかを知りたいと思った。そして、村の人々との話や、白人たちによって残された記録資料のなかからさがし出してこうとした。しかし、それでは一向に状況が明らかにならない。変化の節目は必ずインボング族の外からやってきて、なぜ、それがやってきたのか、インボング族のなかからは見えてこないからだ。

私は、変化の流れ出てくる源流点までたどっていくことにした。そうすると、東部ニューギニア高地語系全体が、そのなかで変容が総体として進行していく巨大な器として浮かびあがってきたのである。前節で述べた東部ニューギニア高地語系が言語的境界であることを超えて、同時に、行政・経済のシステムとして働いてる、という事態は実はその帰結なのである。すなわち、変容に関して東部ニューギニア高地語系の諸民族は、他とは異なる一つの固有の運命を共有していたのである。

それゆえ、インボング族の変容をたどる時われわれは二重の視点から見ていかざるを得ない。それは、東部ニューギニア高地語系を一つの変容の器として捉える視点と、インボング族のなかで彼らの眼前に、そしてまた彼らの内面に生じた変容を見る視点である。

そして、その両者を一つの記述に結ぶためには、まず何よりも、インボング族が東部ニューギニア高地語系のなかでどのような位置にあるのかを見ることが必須となる。そのための準備はすでに与えられている。すなわち、先に述べた東部ニューギニア高地語系をシステムとしている三つの糸、すなわち、言語、行政、経済の糸によってインボング族を定位していけばいいのである。

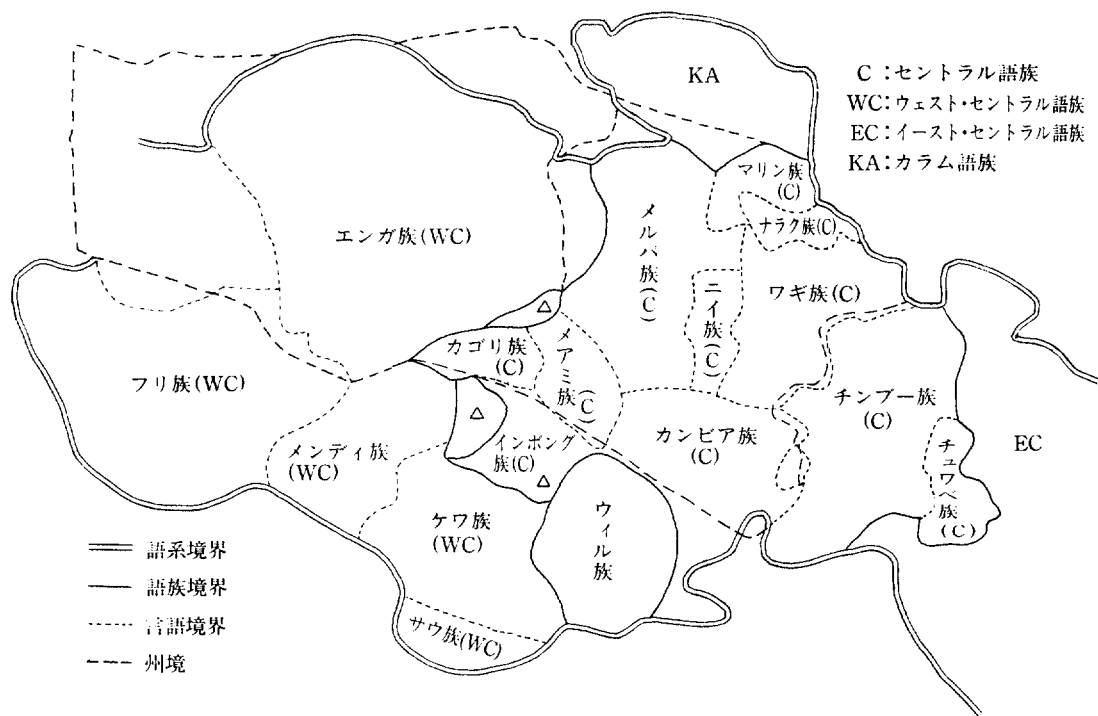
IV インボング族を定位する

インボング族はまず言語的にはセントラル語族の領域がウェスト・セントラル語族の領域に向かって西南に突出した突起部を占める民族である(第6図)。

インボング族は、その東、南東、南西辺においてそれぞれ隣接するメンディ、ケワ、ウィルの3民族の言語を全く理解することができない(ただし、隣接地域の住民はパイリンガル、トリリンガルであることもある)。

それに対して、同じセントラル語族に属する北西のカゴリ族、北東のメアミ族、東のウェストカンビア族とは音韻上の差異や単語の違いを感じながらも言葉が通じる。その意味ではワーム(Wurm)の言うようにインボング族、カゴリ族、ウェストカンビア族、メアミ族は一つの言語をなす四つの方言集団であると言ってもよいのだが、彼ら自身は別の言葉としてそれぞれ帰属意識を持っている。ポルトガル人とスペイン人の間で言葉が通じるから、両言語は一つの言語の二つの方言にすぎないと言いうるとすれば、これら四つのグループもそれぞれ一つの言語内部の方言集団ということになろうし、ポルトガル語とスペイン語を言語ではなく方言だと主張する人にはこれら4言語を方

第6図 インボング族周辺地域の言語分布



(出所) Wurm, S. A. 編, *Languages of the Highlands Province Papua New Guinea*, キャンベラ, Australian National University, 1978年, に依拠したが, インボング族周辺については私の知見をもとに訂正を加えている。

言としてもよいであろう。しかし, ここでは, ポルトガル語とスペイン語を異なった言語と見なす一般の見解に従って, すなわち, 各グループがそれぞれ自称を立て, 互いに他と区別しあっているという点において, これら4言語は各々別の言語であるとしておく。

これら隣の3民族を越えて, メルパ族の地へ行くと, インボング族はそこで交される会話を聞きとることができなくなり, 言葉が通じなくなる。しかし, インボング族の人間がメルパ族の地に住みつくと, 若者なら数カ月でメルパ語が聞きとれるようになってくるという。インボング族, カゴリ族, ウェストカンビア族, メアミ族は彼らの間の言語的類縁性の高さと, それに比してのメルパ

族の異質性を認識しており, はっきりとそう言明する。

ところが, 行政区分においては, カゴリ族, ウェストカンビア族, メアミ族がメルパ族とともに, ウェスタンハイランズ州に含まれるのに対し, インボング族は唯一, サザンハイランズ州に属する。つまり, インボング族はサザンハイランズ州の大多数を占めるウェスト・セントラル語族の諸言語のなかにただ一つ切り取られたセントラル語族の一員なのである。このことはインボング族の民族としての自己意識に重要な影響を及ぼさずにはおかない。

というのは, 行政区分は白人到来後の数十年の歴史のなかで, 特に社会活動の場が一つの民族を

はるかに超えて、ニューギニア高地さらにはパプアニューギニア全体に達した時、人々の生活のうえに制度的枠組として覆いかぶさり、人々に帰属意識を与えるものとしてしっかりと根づくに至ったからである。

それはとりわけ個々の民族の領域の外、民族同士が混り合って生活が営まれる町や道路といった空間における存在や行動やできごとの文脈を規定する役割を受けとるに至った。

たとえば、パプアニューギニア全国から人々が集まってくる首都のポートモレスビーにおいて、違った地方からきた見知らぬ者と出会ったなら、インボング族の者はまず、自分はサザンハイランズ州出身であり、メンディ（サザンハイランズ州の州庁所在地）の者であると述べて自己を定義する。700を超えるといわれるパプアニューギニアの民族のなかからインボングと言ってもほとんどの人間には意味をなさぬからだ。その時、彼らインボング族は、言葉の通じるカゴリ族、ウェストカンビア族、メアミ族とではなく、全く語族を異にするケワ族、ウィル族、メンディ族といった諸族と自らを同一視しているのである。

自分の地においても同様に、インボング族は州境の向こうのカゴリ族、ウェストカンビア族、メアミ族、メルパ族といった諸族を一括して「ハーゲン側の者」（マウントハーゲンはウェスタンハイランズ州の州都）と呼び、自らを「イアリブ側の者」（インボング族とケワ族の一部を含む郡の郡庁所在地）と呼んで対照させ、両地域にまたがる事件が起こった場合は、その対照に基づいて文脈が規定され、それに応じて行動をとる。

たとえば、ウェスタンハイランズ州内のハイランズ・ハイウェイで、サザンハイランズ州の運転手が人をひいたら、ひかれた村の者は道路を障

害物でさえぎって、賠償金が支払われるまでは、サザンハイランズ州からきた車をいちいちチェックし、時によっては通過を阻止しようとする。その結果、ウェスタンハイランズ州を貨幣経済の流れの上流とするサザンハイランズ州全域に経済の停滞、時にはまひが及ぶのである。州を越えた公道という場で生じた交通事故はすぐさま、州への帰属意識によって、二つの州の間の政治・経済問題という文脈規定を受けるのである。インボング族は、仮に運転者が他族の者であったとしてもサザンハイランズ州の一員として、同一視されるのである。

この結果、インボング族は帰属意識においては、文化的に近縁のカゴリ族、カンビア族、メアミ族などの諸族から自らを切り離し、しかしながら、同一の州に属し、その意味で帰属意識を共にするケワ族、ウィル族、メンディ族などの諸族とは異質であるという独特な帰属規定のもとに置かれることになる。

つまり、サザンハイランズ州とウェスタンハイランズ州の区分において、言語分布とのずれが、インボング族において、そして彼らにおいてだけ起ったということが、インボング族の現状に独特の位置付けを与えているのである。

このように、インボング族は言語的系統から見ればウェスタンハイランズ州のセントラル語諸族に連なり行政区分によってはウェスト・セントラル語族とともにサザンハイランズ州に含まれるのだが、これを第3の糸、すなわち経済のシステムから定位すると、再びウェスタンハイランズ州に連結してゆくのである。

すでに述べたように、ハイランズ・ハイウェイの開通とそれに接続する支線道路の体系は東部ニューギニア高地語系の覆うニューギニア中央高地

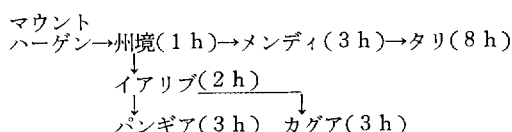
を一つの大きな交通・経済圏としそのなかに二つの経済的中心地、すなわち東のゴロカと西のマウントハーゲンを生み出した。両者はともに人口1万数千規模の町であり、パプアニューギニアの都市のなかではそれぞれ人口規模で6位(ゴロカ)と8位(マウントハーゲン)に位置する(注1)。パプアニューギニアでは首都ポートモレスビー(人口12万2800)、産業上の中心ラエ(人口6万1700)に次ぐ3位から8位までの人口1万~2万規模の中都市は、いずれも人口20万~40万人程度の地域を後背地とする地域的中心地である。中央高地の二つの町ゴロカとマウントハーゲンを支えているのは、その回りに稠密に分布する人口の大きさ(111万8700。パプアニューギニア人口の37.2%)に加えて、ニューギニア高地に気候的・土壌的・社会的に適していた換金作物コーヒーの小農的栽培の成功であった。第2次大戦終了後、世界のコーヒー消費の拡大の流れに乗って、開始され急速に伸びていったニューギニア高地のコーヒー栽培の2大集積地がこのゴロカとマウントハーゲンであり、農家やプランテーションのコーヒーはここで集荷されてハイウェイを通して海岸部のラエまで運ばれ、海外に向かって送り出される。二つの町は、そのコーヒーで得た現金を持つ周辺の農民たちを相手にして商業・交通業も活況を呈している。

この二つの町をそれぞれ中心として、ハイランズ5州は二つの経済圏に分かれている。ゴロカを中心とするイースタンハイランズ州とチンブ州からなる東部圏とマウントハーゲンを中心とするウェスタンハイランズ、エンガ、サザンハイランズの3州からなる西部圏である。ともに、コーヒーを動脈血とし、ハイランズ・ハイウェイとその支線道路を動脈として形作られ、二つの中心地はそれぞれの心臓部に相当する。

そのうち、われわれの見ているインボング族の属するマウントハーゲン経済圏についていうなら、その経済活動の圧倒的部分はウェスタンハイランズ1州に集中している。ニューギニア高地経済の根幹をなすコーヒーの生産についていえば、この3州の全コーヒー生産量の89%がウェスタンハイランズ州に集中し、それに比してエンガ州7%、サザンハイランズ州4%とその比重は極度にウェスタンハイランズ州に偏っている(注2)。ニューギニア高地におけるほとんど唯一の商品生産物であるコーヒーの生産量はその地域の商品経済の規模をほぼ正確に反映するから、マウントハーゲン経済圏は、商品経済の先進地域であるウェスタンハイランズ州に後進地帯であるサザンハイランズ、エンガの2州が付属するという構成をとっていると言ってよい。

とりわけサザンハイランズ州は商品経済の活動が不活発で、1976年には州の全消費・投資支出の約3分の2(66%)を中央政府の交付金が占めているほどである(注3)。このことは、ただちに州民の貨幣取得への欲求が小さいことを意味するのではない。コーヒー栽培世帯数も決して少なくはなく、たとえば、1980年の人口統計によればサザンハイランズ州4万8400世帯のうち1万9962世帯がコーヒー栽培を行っており、それはウェスタンハイランズ州のコーヒー栽培世帯数4万4361と比べてほぼ1:2の比率となる。これは1978年の両者の間のコーヒー生産量比1対22.5と比べると約10倍にのぼる(注4)。すなわち、サザンハイランズ州のコーヒー農家はウェスタンハイランズ州のそれに比べてきわめて零細なのである。2州の間のこの経済状況のコントラストを念頭においてサザンハイランズ州とウェスタンハイランズ州、そして、そこにおけるインボング族の位置関係を考えてみよう。

第5図を見ると、インボング族の地にはサザンハイランズ・ハイウェイがウェスタンハイランズ州から入り、途中、そこからイアリブ、パンギア、カグアなどサザンハイランズ州東部の郡庁所在地へ向かう支線道路が分かれている。マウントハーゲンからウェスタンハイランズ、サザンハイランズ両州の州境にかかるカウゲル河橋まで村人たちの交通手段である乗り合いのマイクロバスで約1時間、そこからインボング族の地にはいり、さらに2時間ほどでサザンハイランズ州の州庁所在地メンディに到着する。その間、半分ほどの行程はインボング族の地を通っている。また、ハイウェイから途中で南に分かれ、イアリブ、パンギア、カグアへ到る道を進めば、カウゲル河橋から1時間ほどでインボング族の地の南端、ケワ、ウィル両族との境界点近くに位置する州庁所在地イアリブに到る。以下、マウントハーゲンから州内の主要地までの大まかな所要時間をあげておく次のとおりである。



これから明らかなことは、インボング族の地を通ることなくサザンハイランズ州からウェスタンハイランズ州へ入ることはできない、ということである(注5)。すなわち、インボング族の地は、マウントハーゲンを心臓とする動脈がサザンハイランズ州において枝分かれしていくつけ根に位置するのである。つまりサザンハイランズ州ーウェスタンハイランズ州間の全交通量は合流してインボング族の地の上を流れていく。このことは、インボング族の地にはサザンハイランズ州の他族の地よりもはるかに大きな交通量が流れているということを意味する。これによってハイウェイを通過

する人間が道沿いの店や道端や市場の野菜・果物売りから買っていく飲食物や嗜好品のもたらす貨幣収入の機会の大きさはもちろんであるが、頻繁な自動車の通行が行なわれているということがそれ自体でもたらす人々の意識への影響、すなわち、彼らの地は外部世界に向かって開かれているのだ、彼らの地はマウントハーゲンとそれによって代表される世界と繋がっているのだ、という感覚は、計量化こそできないが、社会的にはそれよりはるかに重要なものである。

この感覚は、さらに、以下のような事実をとおして彼らの経験のなかで裏づけをされる。

人々が使う乗り合いバスは約1時間の行程で2*₣ (日本円にして約300円, 1987年) の料金である。前に記したマウントハーゲンからサザンハイランズ州主要地までの所要時間表を参照すると、たとえばマウントハーゲンからウェスタンハイランズ/サザンハイランズ州境のカウゲル河橋までは約1時間、2*₣ の料金となる。州庁所在地メンディまでは6*₣、さらにサザンハイランズ第2の町タリまでは16*₣ を要することになる。タリからマウントハーゲンへ何かの用で行って帰ってくると往復のバス代だけで32*₣ (日本円4800円, 1987年) にかかる。これは、商品経済の力の弱いサザンハイランズ州民から考えるときわめて大きい額である。ちなみに1975/76年のサザンハイランズ州のコーヒー農家のコーヒー買却による収益は1世帯平均26*₣ (しかも、コーヒーを栽培していない世帯の方が多い) (注6) であるから、彼らにとっての32*₣ がいかに大きい額であるか、推察に難くない。ごく一部の高収入者を除けば、何かの機会に便乗して、ただで車に乗せてもらう以外に、タリ以遠の普通の人間がマウントハーゲンまで出でいけるチャンスは経済的に非常に小さいのである。しかも、タリ

以遠には州人口の約30% 7万5000人近くが住んでいるのである。

それに対して、インボング族の地からマウントハーゲンまでは片道2～4時間、往復でも4～8時間である。これでも彼らの目から見ると決して小さな額ではないが、経済的負担感を与えるマウントハーゲンまでの心理的距離は所要時間が与えるそれよりはるかに小さくなる。

事実、マウントハーゲン発サザンハイランズ州行のバスの大半は目的地がメンディ、イアリブ、パンギアまでなのである。

このことは、3時間圏を超えてその向こうにバスを走らせることはあわない、つまり、コストに対して乗客は激減することを物語っている。そして、マウントハーゲンから3時間圏を地図上に描くならば、サザンハイランズ州におけるその半ば近く、しかもマウントハーゲンから最も近い隣のなかにインボング族の地がはいることがわかる。すなわち、マウントハーゲンへの往復のサザンハイランズ州の乗客のうち、インボング族の占める比率がかなり高いのであろうことは以上の事実から容易に推測されうるのである。マウントハーゲン発サザンハイランズ州行バス乗客の民族・地域別の統計調査はまだ行なわれていないが、私の経験から少なくとも4人に1人、ことによると半数近くがインボング族の乗客ではないかと思われる。インボング族の人口は1万4431人(1980年センサス)(注7)で、サザンハイランズ州全人口比5.43%($\approx 1/18.5$)である。それゆえ、私の推測が妥当ならば、インボング族のマウントハーゲンへの往復頻度は州平均の4.6～9.2倍に達することになる。

すなわち、インボング族の地がマウントハーゲンと繋がっているという感覚は、現実には人々自ら

が往来する頻度によって裏打ちされていると思われるのである。

ところで、先に私は人口1万3000のマウントハーゲンを都市と呼んだ。現代日本の常識からするとこれはやや奇妙に響くかもしれない。しかし、事実、まぎれもなくマウントハーゲンは都市以外の何物でもないのである。人口規模の小ささはそれを支える産業規模の小ささによるが、国というものはその産業(および総人口)の規模に応じた都市をもつのである。

それでは、パプアニューギニアにおいては人口のどのレベルから都市が始まるのだろうか。それは、都市とは何かという問に答えることでもある。

ニューギニア高地の村落以外の居住地は、私には、次の四つに分けられるように思われる。すなわち、都市、単なる州庁所在地、郡庁所在地、ミッションステーションであり、この順に規模が小さくなっていく。

それでは都市とは何かをそれより一段規模の小さい単なる州庁所在地と比べて、その特質を考えてみよう。

まず、最も大規模な、私が都市と呼ぶゴロカやマウントハーゲンのような、一つの州を超え数州の経済的中心であるような町、これは先にも述べたとおり1万数千の規模の人口を持つ。

次いで、地域の中心ではないが、州庁所在地として州の行政・政治上の中心となるような町、たとえばメンディ(人口4130人。サザンハイランズ州の州庁所在地)、ワバグ(人口1518人。エンガ州の州庁所在地)、クンディアワ(人口4299人。チンブー州の州庁所在地)といった町がくる。こうした町には州庁舎、州議会の建物をはじめとして郵便局、銀行、病院、旅行者用旅館、中学校、飛行場などがあり、

飛行場には週1, 2便の割合で首都ポートモレスビーからの往復便が飛んでいる。都市と単なる州庁所在地との差はすでに人口の大きさに明瞭に現われているが、さらに、そこを発着する首都との往復便の上によりくっきりと示される。すなわち、単なる州庁所在地と首都との往復便は週に1, 2便で、プロペラ機であるのに対し、都市と首都との往復便は日に1, 2便の頻度で、しかもジェット機が運行しているのである。首都ポートモレスビーからの陸上交通路を欠いたニューギニア高地では、この飛行便が首都との唯一の交通路となることを考えると、人と情報の流れの大きさ、速さ、頻度が両者の間ではっきり一段、格が異なることをこのことは示していると言えよう。

こうしたランクの違いは、郵便局の規模と公衆電話の数、旅館の数等にもそれぞれ現われてくるが、それらの数量的差異の背景となり、都市と単なる州庁所在地を本質的に分かつのは商業活動の活発さの如何である。両者の間では商店の数と街路を行きかう人間の数が全く違い、それによってかもし出される活気の有無が画然としているのである。

たとえばマウントハーゲンの場合、商業活動が行政的中心という性格を圧倒して、その街路を終日にぎわせている歩行者の大半は州庁には用のない買物やぶらぶら歩きにやってくるのに対し、メンディでは、お昼の一時、数少ない商店の前がにぎわう以外にはごった返すということがない。つまり、メンディの商業活動は州庁職員の昼休みに依存しているのである。換言するならば、メンディにおいては商業活動すらもが、行政的中心という性格によってしか成り立ち得ないということである。私に、一方を都市であると感じさせ、他方をそう呼ぶことをひかえさせたものは、

一に、その町が持っている雰囲気、商業活動によってかもし出される独特の雰囲気の有無なのであった。

商業、つまり富と快楽をめぐる人間の欲望が渦巻き交錯する所に都市としての活気が生まれる。それを媒介するのはもちろん「かね」である。メンディには都市の都(すなわち、行政的中心)の要素はあっても、市(商業センター)の要素が欠けている(あるいは著しく弱い)のである。そしてそれは先にも述べたサザンハイランズ州全体の貨幣経済の圧倒的な行政依存性(州の全消費・投資支出の3分の2までが中央政府からの交付金であった)の必然的な産物なのである(注8)。そして、マウントハーゲンやゴロカに都市の活気が存在しうるのは、先に述べたように、換金作物によってかなりの現金(「かね」)を周辺の村々の人間たちが手にしているからである。インボング族は、サザンハイランズ州にありながら実はこうしたマウントハーゲンに商業センターとしての活力を与えているコーヒー多収入圏(年間1世帯当り200*以上)の一番外側にかかっているのである。

こうして、再びインボング族のサザンハイランズ州における特異性が浮かびあがってくる。

すなわち、インボング族はサザンハイランズ州で唯一、都市に向かって開かれ、それを支えると同時に、その提供する(主として物質)文明を享受し、その不断の影響下にさらされる都市世界(と呼んでおこう)の最外線に位置しているのである。

そしてマウントハーゲンという都市が体現しているのは現代資本主義文明という文明である。

インボング族の村人たちの目には、マウントハーゲンの商店に陳列されているものの一つ一つが驚くべき富として映じている。彼らにとっては、やかん1個、ジーンズ1本、懐中電灯1本ですら

が財産なのであり、ノート1冊、コーラ1本、魚の缶詰1個がぜいたく品なのである。軒を並べる中国人商店の棚にうず高く積まれたジーンズをはじめとする色とりどりの衣類、卸屋の米袋、魚の缶詰、コンビーフの箱詰、肉屋の冷凍庫にどっさりとしまいこまれている骨つきの牛や羊の肉、そしてオーストラリアの大手流通グループ「スティームシプス」や「バーンズフィルプ」の日本の大型スーパーマーケットにも匹敵する多彩でモダンな品々、ラジカセ、ウォークマン、ベッド、テーブルセット、自転車（子供たちのあこがれの的）、ミシン、テレビ、ライト、魔法びん、時計、靴、帽子、鞆、きれいな包装のなかに入ったお菓子、さまざまな種類の缶詰（ドッグフードまである）、われわれが日々目にする一切が光り輝いているのである。事実、村人たちの持ち物は黒っぽくくすんでいるのに対し、こちらはすべてがぴかぴかと光っている。

こうした商店が高級スーパーも含めて、マウントハーゲンには100軒近くある。マウントハーゲンへ遊びにきた若者はこうしたあふれかえるばかりの巨大な富をかかえた店の連なりを、ニューギニア人店員のチェックや中国人、白人店主の疑ぐり深い目に見守られながらただひたすら見て歩く。そしてお昼時には、そうした貧乏人相手のテークアウトの店で50[¢]（75円）の揚げジャガステイックと50[¢]のコーラを、時にはけけばけしい色のソーセージやブタや羊の屑肉を煮こんだもの、または揚げ魚と一緒に食べるのである。

村の若者がマウントハーゲンへ出かける時は水浴びをし、前日川で洗っておいたジーンズやTシャツを着こんでゆく。土曜日には女の子と示しあわせてデートする者も少なくない。

マウントハーゲンとは村人にとってそういう空

間としてあるのである。千葉や埼玉の少年少女にとっての原宿と同様（あるいはそれ以上に）マウントハーゲン都市世界の外縁の村々からくり出す若者たちには、マウントハーゲンは最新のファッションと魅力で輝いている夢の空間、一時、日常生活を忘れ、いつかはこうなりたいと願う夢の生活の中に浸れる空間、一時の変身を味わう空間なのである。

都市世界の外縁に位置するというのはこういうことなのである。そして、都市世界の外縁に位置する者に映ずる都市とはこうした空間として現われるのである。そこには、文明化を進展させる最も強力な磁場が存在するのだ。

（注1） 谷内 前掲書 159ページ。

（注2） 同上書 153ページ。

（注3） French, W.; M. A. H. B. Walter, "Background to the Southern Highlands Province," W. French; M. A. H. B. Walter 編, *What Worth Evaluation?*. ポートモレスビー, Institute of Applied Social and Economic Research, 1984年, 24ページ。

（注4） Papua New Guinea, *1980 National Population Census: Final Figures: Provincial Summary, Western Highlands*, ポートモレスビー, National Statistical Office, 1985年, 74ページ/同, *Southern Highlands*, 90ページ。

（注5） メンディータンプルーマウントハーゲン道路は路面が悪く通行量はわずかである。

（注6） French; Walter, 前掲論文, 24ページ。

（注7） Papua New Guinea, *1980 National....., Southern Highlands*, 44ページ。

（注8） French; Walter, 前掲論文, 24ページ。

V 結 論

さて、以上の簡単なスケッチから、インボン族をめぐるさまざまな空間的枠組が明らかになった。

まず、大枠組としてニューギニア島という枠組があり、その地理的そして文化的下位枠組としてニューギニア高地がある。さらに、ニューギニア高地のなかに東ニューギニア高地語系という言語群の一塊りがあり、インボング族はその枠組のなかに定位される。すなわち、インボング族は東ニューギニア高地語系のセントラル語族の一員で、しかもその西南端においてウェスト・セントラル語族と直接境を接する民族である。

一方、ニューギニア島は、別の体系すなわち近代的政治体系においては、東の独立国パプアニューギニアと西のインドネシアの属領西イリアン（ないしは西パプア）に分かれるが、インボング族は東のパプアニューギニアをその政治的枠組として定位される。すなわち、白人による文明化の歴史がいまだ50年にしかならないパプアニューギニア中央高地5州（それは空間的にはほぼ東ニューギニア高地語系の領域と重なり合う）のうちでも、最も遅れて1950年代中葉に白人の統治が開始されたウェスト・セントラル語族諸族が大半を占めるサザンハイランズ州の東北端に、セントラル語族の民族としてはただ一つ属している。

すなわち、言語グループ（これは文化的に近縁であるということでもある）の西南端であり、行政単位の東北端であるインボング族は、言語区分と行政区分がずれを生じたちょうどそのずれの上に自らの生存する空間を広げている。

すなわち、他の諸民族のように言語枠組と行政枠組が一致するのではなく（たとえばウェスタンハイランズ州はセントラル語族、サザンハイランズ州はウェスト・セントラル語族というように）インボング族はセントラル語族の一員でありながらサザンハイランズ州に属するのである。すなわち、一方の枠組のもとでは他方の連結性は切断され、他方の枠

組のもとでは一方の連結性が切り離される。つまり、インボング族はどちらの枠組にも属しながら、そのことによってどちらの枠組からも切断されるという特殊な位置にあるのである。

このような交差枠組のうえに、近代的経済と交通の体系においては、マウントハーゲン都市世界の最外縁に連なり、そのことによって現代都市文明の刺激圏内にあるという意味では都市の影響下におかれながら、しかし都市とその内実は自分たちの外の世界に属するという、他のサザンハイランズ州諸族とは異なる位置を占めるに至る。

以上のような枠組のからみ合いのなかにインボング族は定位される。これで、われわれはインボング族についての外延的理解を共有するに至った。以後、インボング族に関する内包的議論を進めていく際、以上の外延的理解は所与のものとして了解されている（少なくとも、参照されうる）という前提に立って議論を進めてゆける。これが全ての議論に先立ってインボング族の空間的定位を行ったゆえんである。

付表 東ニューギニア高地語系

イースタン語族(50,230)

ガドサップ-アウヤナ-アワ支族(35,373)

●ガドサップ(25,367)

●ガドサップ(11,927)

△ガドサップ(10,319)

△オンテヌ(606)

△オヤナ(1,002)

●アガラビ(13,440)

●アウヤナ(8,217)

●アウヤナ(6,813)

△アウヤナ(6,271)

△コセナ(542)

●ウスルファ(1,404)

●アワ(1,789)

●タウナ(178)

- ヤキア(276)
- 北西部(566)
- 南部(769)

タイロラ支族(14, 508)

- ワファ(1, 000)
- ビヌマリエン(217)
- タイロラ(13, 291)
- 北(4, 832)
- 中央(1, 769)
- オブラ(963)
- 南(4, 554)
- ピナタ(1, 173)

オウエナ支族レベル孤立言語(349)

イースト・セントラル語族(212, 958)

ゲンデ支族レベル孤立語(6, 143)

シアネ支族(27, 281)

- シアネ(23, 479)
- コムンク(7, 003)
- オノ(3, 277)
- コレイパ(2, 307)
- ランバウ(10, 892)
- ヤビユファ(1, 901)

ガフク支族(54, 863)

- ガフク-アサロ(34, 548)
- アサロ(18, 445)
- △ガフク(16, 103)
- ベナベナ(20, 315)

カマノ支族レベル孤立語(85, 580)

- カマノ(43, 338)
- ヤテ(21, 126)
- カニテ(3, 137)
- ケヤガナ(12, 284)
- ヤテ(5, 705)
- ヤガリア(21, 116)
- カミ-クラカ(4, 469)
- ゴトミ(2, 032)
- オログティ(2, 165)
- モヴェ(4, 519)
- ダゲナヴァ(373)
- カマテ(2, 369)
- ヒラ(2, 318)
- ファ(2, 871)

フォレ支族(39, 091)

- フォレ(16, 655)
- 北フォレ(7, 927)
- 中央フォレ(5, 137)
- 南フォレ(3, 591)
- ギミ(22, 463)
- 東部(10, 907)
- 西部(6, 976)

セントラル語族(332, 522)

チンブー支族(165, 406)

- チンブー(137, 654)
- クマンドム(79, 482)
- △チンブー(69, 650)
- △ドム(9, 832)
- ナガネ(1, 000)
- シナシナ(25, 079)
- △タバレ(21, 000?)
- △グナ(4, 000?)
- マリグ(26, 593)
- △エラ(2, 081)
- △ユリ(5, 362)
- △キア(3, 994)
- △ゴリン(12, 656)
- △ケリ(2, 500)
- 塩ユイ(6, 500)
- チュアベ(23, 107)
- チュアベ(6, 376)
- △カマリ(2, 597)
- △ゴミア(2, 384)
- △ケノパイ(733)
- △キヌク(662)
- エリンバリ(16, 731)
- △ドゥマ(14, 035)
- △ガイ(2, 696)
- ノマネ(4, 645)
- ノマネ(3, 645?)
- キアリ(1, 000?)

ワギ支族(52, 809)

- ワギ(44, 927)
- 北ワギ(8, 386)
- 中ワギ(36, 541)
- ニイ(7, 882)

ジミ支族(14, 318)

- ナラク(3, 438)

● ガンジャ(3, 565)

● マリン(7, 315)

ハーゲン支族レベル孤立語(99, 989)

● メルパ(68, 282)

● カゴリ(31, 707)

● アウア(785)

ウェスト・セントラル語族(331, 793)

エンガ支族(174, 214)

● エンガ(164, 750)

● コボナ(6, 766)

● ラヤボ(25, 023)

● サウ(15, 228)

● カイナ(10, 959)

● マイ(38, 508)

● ヤンダボ(10, 804)

● カンデベ(24, 987)

● マラムニ(3, 600)

(イニャイを含む)

● タヤト(13, 507)

● キャカ(15, 368)

● カンティンジャ(900)

● レンベナ(600)

● ネテ(200)

● イピリ(7, 764)

● 東部(4, 528)

● 西部(3, 236)

フリ支族レベル孤立語(60, 883)

メンディーケワ支族(96, 696)

● メンディ(45, 450)

● 北メンディ(18, 334)

● メギ(1, 000?)

● 南メンディ(17, 112)

● 西メンディ(10, 040)

△ ニパ(?)

△ ワラ(?)

△ アウグ(?)

● ケワ(48, 121)

● 東部ケワ(18, 506)

● 南部ケワ(5, 123)

△ 南東部ケワ(462)

● 西部ケワ(24, 492)

△ 北西部ケワ(10, 240)

● サウ(3125)

カラム語族(19, 601)

カラム-コボン支族(17, 717)

● カラム(13, 646)

● コボン(4, 671)

ガンツ支族レベル孤立語(1, 884)

ウィル語族レベル孤立語(15, 292)

ケナティ語族レベル孤立語(592)

(出所) Wurm, Stephan A., *Papuan Languages of Oceania*, チュービンゲン, Gunter Narr Verlag, 1982年, 121, 124~126ページに依拠した。

(注) (1) なお, この分類はワームによる試行的分類であり, 絶対的に確定したものではなく, 私の知見と反するものもある。読者はしかしこの分類からニューギニア高地の言語分岐の激しさ, およびそれが大きくどう分かれているのかについての見通しを得ることはできよう。カッコ内の数字は人口である。

(2) ワームの分類では各段の分類上のレベルで支族以下は下記のとおりである。

● 方言集団, ● 方言, △ 支方言。

(アジア経済研究所地域研究部)